

妙一尼御前御消息

法華經を信ずる人は冬のごとし、冬は必ず春となる。いまだ昔よりきかずみず、冬の秋とかへれる事を。いまだきかず、法華經を信ずる人の凡夫となる事を。經文には「若有聞法者無一不成仏」とかれて候。
(御書 8 3 2 頁)

【通釈】

法華經を信ずる人は冬の状況にあるのと同じである。だが、冬は必ず春となる。いまだ昔から聞いたことも見たこともない、冬が秋に戻ったことを。同様に、いまだ聞いたこともない、法華經を信ずる人が成仏せずに凡夫に戻ったことを。法華經方便品には「もし法（法華經）を聞くことができた者は、一人として成仏しない者はない」と説かれている。

【主な語句の解説】

・法華經

→末法においては、大聖人の下種仏法である南無妙法蓮華經のこと。

・若有聞法者無一不成仏

→法華經方便品第二の經文。「若し法を聞くこと有らん者は 一(ひと)りとして成仏せずということ無けん」(法華經 1 1 8)と読む。

【背景と大意】

本抄は、建治元（一二七五）年五月、日蓮大聖人が御年五十四歳の時、身延において認められ、鎌倉に住む妙一尼御前に与えられたお手紙です。この書を著される四年前、文永八（一二七一）年には、大聖人の御身のうえに竜口法難や佐渡配流という身命に及ぶ大難が起きました。この余波は、弟子や檀越にも及び、多くの者達が堪えきれずに退転してしまったのです。そのような厳しい状況を乗り越え、妙一尼は純粋な信心を貫き通しました。本抄では、子息を亡くしたうえに、健康のすぐれない子と女の子達の面倒をみななければならない妙一尼を思いやられ、故人が信心の功德によって成仏し、妻子を見守ってくれていると仰せられます。お手紙の終わりには、大聖人に衣を御供養されたことや、下人を遣わされたことに対する妙一尼への御礼の言葉が綴られています。

【参考御書並御指南】

・法華經方便品「もし法（法華經）を聞くことができた者は、一人として成仏しない者はない」（取意）

- ・妙一尼御前御消息「仏語むなしからざれば法華経ひろまらせ給ふべし」 (御書 8 3 2)
- ・報恩抄「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」 (同 1 0 3 6)
- ・第二祖日興上人『日興遺誠置文』
「未だ広宣流布せざる間は身命を捨てゝ随力弘通を致すべき事」 (同 1 8 8 4)
- ・日如上人御指南
物事というのは確信から生まれてくるわけですから、まず我々はこの御本尊様に対して絶対の信を取る。どんなことがあっても、この御金言の如く『無一不成仏』、一人として成仏しない者はいない、この信心を続けていけば、だれもが必ず成仏するのだとの大確信を持っていくところに、我々自身の大きな成長と一生成仏、そして広宣流布への道のりが見えてくるのではないかと思います。
(信行要文 3-3 1)
- ・佐渡御書 「宿業はかりがたし」 (御書 5 8 0)